

別紙（最終年度評価書）

平成31年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

<p>通し 番号</p>	<p>2</p>	<p>事業区分： 劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名： 公益財団法人せたがや文化財団 施設名： 世田谷文化生活情報センター （世田谷パブリックシアター）</p>
<p>助成対象活動に関する評価 （妥当性）</p> <p>当該劇場は、世田谷区第3期文化・芸術振興計画の将来像である「心潤う、文化・芸術のまち～文化・芸術に親しみ、魅力を発信する」の実現に向け、計画の4つの視点に基づき、当該劇場の5つのミッションが掲げられており、世田谷区の文化政策を牽引する重要な役割を担っている。また、5つのミッションを具現化するために、文化芸術をつくる「公演事業」、文化芸術を広める「普及啓発事業」、文化芸術を育てる「人材養成事業」の3つのビジョンを設定し事業展開を図っている。</p> <p>事業計画において、「つくる」「広める」「育てる」という観点から、計画に必要な構成要素が有機的に関連し、当初の予定通り、事業が推進されたことが認められる。</p> <p>（有効性）</p> <p>劇場空間を活かし劇作家の世界観を自在に表した小山ゆうな演出「チック」の再演、同時代性を重視し古典作品の再評価に挑んだ森新太郎演出「The Silver Tassie 銀杯」「メアリ・スチュアート」、手話通訳を創作に取り入れ、勇気と希望に満ちた明るい未来を想起させた「コンドルズ」の新作公演、インクルーシブシアターの実績を持つ「ストップギャップ」の海外舞踊招へい公演など、オリジナリティあふれる舞台や再演可能となるレパートリー作品の拡充についてアウトカムの発現が認められる。</p> <p>大型主催公演及び国際交流事業の作品数については目標を達成していたものの、森新太郎演出作品及び海外舞踊招へい公演は目標とした平均入場率を下回る実績も認められており、観客増加に課題を残した。</p> <p>平成31年度こどものためのWS「夏休みワークショップ」は目標を若干下回ったものの、ほぼ全ての事業について目標を上回る好実績であった。各事業が地域に根付き安定的な事業推進が計られ、地域住民に劇場の魅力を伝えることや地域交流・地域理解を促進することに成功しており、アウトカムの発現が認められる。一方、事業が安定し地域に定着していることから、無関心層の開発や新規参加者の掘り起こしに、より一層の努力が望まれる。</p> <p>年間延べ500人の参加者及び平均入場率は、当初の目標を大幅に上回っている。特に、「シアタートラム ネクスト・ジェネレーション」では、次代を担う実演家に対して、創造面、技術面、制作面での細かいサポート体制が行き届いており、参加者数及び入場率共に目標値を上回る実績を残した。若手登竜門としての本事業の取組により、支援芸術団体の今後の精力的な活動に期待が持た。上記のことからアウトカムの発現が認められる。</p> <p>【新型コロナや台風等の影響を受けたもの】</p>		

別紙（最終年度評価書）

事業番号 9「海外招聘ダンス公演」

事業番号 15「地域の物語」(無観客で記録映像撮影のみ実施)

事業番号 17「学校のためのWS『ワークショップ巡回団』」3月開催分

(効率性)

事業はほぼ計画通り実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については概ね適切であったと認められるものの、一部の事業において、要望時の予算額と報告時の実績額との間で乖離があった。実効性のある予算積算と適切な予算管理に努めてほしい。

(創造性)

平成 30 年度から演出家森新太郎を 2 年連続で起用し、新訳や戯曲の新解釈の取組により古典戯曲を現代に蘇らせた。埋もれた戯曲を再評価し、同時代性を意識した総合的な演出が奏功した。平成 31 年度における戯曲リーディングでは、上演台本を手掛ける翻訳家と芸術監督が、シェイクスピア戯曲の中でも上演回数の少ない「アテネのタイモン」を題材に、新作狂言の創作プロセスを公開し好評を得た。実験的な取組であったものの、稀少な戯曲選定やシェイクスピア台詞の狂言台本への変換など、企画の構想に独創性が認められる。

また、劇場事業のアクセシビリティの強化を目指し、「チック」「コンドルズ新作公演」において、手話通訳者も出演者の一人として創作したことは、目標に掲げた「演劇的手法を生かしたバリアフリー上演の可能性」に独創性が認められる。

地域住民に支持が高い「地域の物語」公演は、平成 30 年度から 2 年連続でシンガポールとの国際共同を実施することで、両国に大きな刺激を与えた。特に平成 31 年度においては、世田谷区に居住する外国人の参加者を積極的に募り、「日本対外国」という二項対立的な構図を打破し、当該劇場が多文化共生型のコミュニティーシアターとしての存在を再提示した。普及啓発事業の枠組では珍しい共同制作は、海外とのネットワークの構築に成功しており、新規性及び先導性が認められる。

森新太郎演出「The Silver Tassie 銀杯」における演技で横田栄司が第 26 回読売演劇賞優秀男優賞を受賞し、栗山民也演出「チャイメリカ」にて、舞台照明家の服部基が第 27 回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞を受賞した。本事業を通じて国内における当該劇場の評価の向上が認められる。

(持続性)

平成 29 年度に策定した「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」「公益財団法人せたがや文化財団人材活用計画」に基づき、組織体制の再構築と新人事制度の実地が持続的に展開されている。具体的には、職員の内部登用、総合職員の配置、専門業務型裁量労働制の導入、専門職員の主任昇任、勤務シフトの細分化による超過勤務時間の縮減など、職場環境の改善につながっている。特に各課横断的な調整業務を行う人材の配置や上席者の構成員による「人事調整会議」は、特筆に値する人的資源管理体制であり、平成 30 年度か

別紙（最終年度評価書）

ら2か年の間に、常勤職員が7名増員されていることは職員の雇用安定に全力で取り組んだ結果として大いに評価できる。

外部資金の獲得は平均180万円強を調達し、友の会会員数は平均5,600人強を保持している。演目によって会員数の増減は認められるものの、当該劇場の支援者は一定程度確保できていると認められる。

再演可能なレパートリー作品の全国展開を目途としたツアー公演では、神奈川県、滋賀県、兵庫県等の公立劇場との連携により、平成30年度55回、平成31年度28回と精力的な活動が認められる。新作公演の鑑賞機会が少ない地域にツアー公演を行うことで、地域文化の発展にも貢献しており、当該劇場の人脈ネットワークや専門的ノウハウが十二分に活用されていることが認められる。今後もアウトカムの発現が持続的に定着することが期待される。

（総 評）

多様な要望に応えられる自由度の高い2つの劇場空間を、演目の特徴やアーティストの個性によって使い分けることが可能な劇場の強みを活かし、質の高い多彩な公演活動を提供していることは評価できる。

一部の大型主催公演や普及啓発事業の観客増加にやや伸び悩みが見受けられるものの、ほぼ目標値に達しており、観客層の拡充が認められる。

国内外の芸術団体やアーティストを受入れ、独創的かつ新規性のある公演を実施しており、我が国の舞台芸術の水準向上に努めている。

「地域」「行政」「他劇場」「海外」とのつながりを重視しつつ、当該劇場がコミュニティの核となり地域の活性化に寄与している。近年は、劇場のバリアフリー化や子供の社会課題の解決にも力を入れており、総体的にプログラムが充実している。

以上のことから、我が国を代表する公立劇場の先駆的存在として、戦略的な事業計画を実行していたと概ね認められる。